

<b>Title</b>	長谷川如是閑と「市民社会論」：国家主義とファシズムに抗して
<b>Author(s)</b>	田中， 浩
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.26, 2003.3：13-53
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4120">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4120</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 長谷川如是閑と「市民社会論」

——国家主義とファシズムに抗して——

田 中 浩

### はじめに——問題の所在

こんにち、「市民社会論」を、「経済学の父」スミスが画いたような資本主義形成期における「経済社会」の構造やエトスの説明理論としてのみ論じる人はほとんどいないであろう。なぜなら、スミスが析出したような「純粋な」資本主義社会は、一八世紀中葉のイングランドに一時期現出した「経済社会」であつたから、その後の欧米諸国における資本主義社会形成期やその発展・成熟期の問題をめぐつて展開された「市民社会論」が、スミスの唱えた政治・経済・社会理論とは異なるさまざまな理論的機能をもつて登場したであろうことはいうまでもないからである。

しかし、これら各種の「市民社会論」に共通するテーマが一つある。それは、いかなる時代、いかなる国々においても、思想家たちが「市民社会論」を問題にしたときには——たとえば、ホッブズ、ヘーゲル、マルクスをみよ——、必ず、かれらは、その時代、その国における「権力と自由」、「国家と個人」の対立・敵対をはらんだ緊張関係を考察・解決するさいの一つのきわめて有効な理論として「市民社会論」を取りあげていた、ということである。とすると、この

「市民社会論」は、もはやたんなる一経済社会理論の枠を越えて、現代社会までをもふくむ、近代全体を通底する自由・平等・平和の実現・保障を内容とする普遍的な政治・経済・社会理論という性格をもった思想あるいは理論と規定することができよう。そして、「市民社会論」が、そうした政治・経済・社会批判的な性格をもつ「一般理論」であると広く解されるならば、各時代、各国毎の思想家たちが、政治・経済・社会批判を展開するにさいして、「市民社会」という明確なチームを用いているかあるいは用いていたかはさして問題ではない、ということになる。なぜなら、「市民社会論」の内容は、人権と自由を抑圧するいつさいの専制権力に対抗するさまざまな理論や思想であるといつてもよいからである。

たとえば、戦前の近代日本についていえば、そもそもそこには、英米仏流の自由で自立的な「市民社会」なるものが成立してはいないのであるから、そこで展開された、「反封建主義」・「反専制主義」・「反軍国主義」・「反国家主義」・「反侵略主義」などの抵抗思想と「近代化」・「自由化」・「民主化」・「社会化」・「市民的自由」・「個人の尊重」・「社会の国家にたいする優越」・「平和主義」などの民主主義思想はほとんど同義語と考えてよく、それらのチームはひつくるめて「市民社会論」の代名詞であるといつてもよいであろう。

ところで、日本において、「市民社会論」というチームがある時期、真に国民的な関心のもとに自覚的な理論・チームとして用いられたのは、敗戦後、日本に「学問の自由」が保障され、また政治・経済・社会構造のドウラスティックな民主化・自由化を旨とした「民主改革」の方針が定まったときのことと思われる。すなわち、「市民社会論」がにわかにな目を浴びて登場してきたのは、一六・一七世紀イングランドにおける、旧封建体制の崩壊過程を通じての「近代資本主義社会の成立」や「近代国家の登場」・「近代人の形成」を社会経済史学の成果や「市民社会」のエートス論を用いて、ある意味では元祖ヴェーバーよりもさらに具体的かつヴィヴィッドに画いた「大塚史学」によって問題提起がなされ、それが戦後日本の「民主改革」と重ね合わされたときであろう。そして、この「変革の担い手」となるべき主

体的近代人の形成を説いた「市民社会論」は、戦前日本の封建制の思想的大家藍ともいべき「超国家主義の論理と心理」を完ふなきまでに叩き潰した「丸山政治学」とともに、戦後日本の「自由化」・「民主化」を先導する理論として、人文・社会科学系の学問分野ではもとよりのこと広く思想界やジャーナリズムの世界においても、敗戦後約二〇年間ほど圧倒的な影響力を与え続けてきたことは周知の通りである。

ではなぜ、「市民社会論」だけが、三五〇年余にわたる近・現代史上、資本主義、福祉資本主義、社会主義、ファシズムなどのさまざまな政治・経済体制の登場・退場において、つねに普遍的な民主主義の思想原理としてサバイバルできたのであろうか。もしも「市民社会論」を、スミスが経済・社会論としてのみ局限していたならば、この理論は、せいぜいブルジョア経済・社会の正当化理論にとどまり、のちに登場してきた資本主義の批判理論である社会主義と競合することはできなかったであろうし、また現代社会批判の理論や思想としての生命力をこんにちにおいてさえも保持し続けることは恐らく不可能であつたろう。

しかし、スミスは、「見えざる神の手」という予定調和理論によつて「国民経済論」——かれは、当時の経済社会のスキームを「資本と労働の協働社会」として捉えていたから、「資本と労働」の対立・敵対関係を前提とする「資本主義経済」なるものは、かれにとっては未知のものであつた——を展開したから、スミスは、「私益」と「公益」の一致を説き、また公正な「自由交易」による国際的インターナショナルな「商業共和国」連帯の可能性を人びとに力強く提示することができたのである。

もつとも、このスミスのいわゆる自由な政治・経済理論にもとづく公正な「市民社会」シビル・ソサエティの成立可能性という理想像は、一九世紀以降の各国における企業利潤の獲得を至上命題とする資本主義の急激な発展によつて、国内的には「資本と労働」とのあいだの対立激化、「失業・貧困」などの発生に起因する社会・労働問題の顕在化、また国際的には、軍事力を背景とした帝国主義諸国家間での激烈な経済競争が展開されたことによつて、早くもくずれ去つた。いや、そ

れどころか、二〇世紀に入ると、資本主義の矛盾が白日のもとにあらわされ、それ故に資本主義の政治・経済体制の廃棄を断固として要求する社会（共産）主義国家が登場したことは、ここで指摘するまでもないであろう。

こうして、一九世紀後半以降、国内的にも国際的にも資本主義と社会主義の正当性をめぐる政治・経済・社会・思想の対立が起り、一方が他方を殲滅させようとして、いまからつい十数年まえに、両体制の横綱米ソ両大国が「冷戦終結宣言」（一九八九年）をだすまでの約二五〇年間、地球の規模で資本主義と社会主義とのあいだで壮絶なるバトルが展開されたことはこれまた周知の通りである。

ところで、相手を殲滅させるまではやむことがないと思われた資本主義と社会主義の対立・敵対関係のあいだに分け入って、両者を調停・協調の方向に誘導した思想が、ホッブズ、ロック、ペイン、ベンサム、スミス、ミル、グリーン、ラスキなどの近代イギリス民主主義思想であった。そして、これらのイギリスの民主主義的政治・経済・社会思想の内容は、まさにスミスが健全な「諸国民の富」の獲得を説いたさいの「市民社会論」のそれと合致するものであり、それ故にこんにち「市民社会論」が、自国の利益や大国の利益獲得の正当化理論になりかねない現代の「市場原理至上論」や「グローバリゼーション」の主張を、人権・自由・公正の観点から批判できる有力な社会思想として再確認されてきたのである。

そこで、いよいよ、本題の「長谷川如是閑と『市民社会論』」について述べることになるが、如是閑は、一八七五年（明治八）に生まれ、戦後の一九六九年（昭和四四）に亡くなっているから、かれは、明治・大正・昭和の三代にわたって生き抜いた思想家であったことがわかる。この間の百年にわたって、かれは、幼年期には、日本における近代国家と近代資本主義形成期の雰囲気を感じており、青年時代には、日本が「日清」・「日露」戦争を経て、帝国主義国家へと転じていくさまをみることができ、やがて日本が一時期大正デモクラシーの仇花を咲かせたのち、一挙にファシズム国家に転落し、アジア諸国を暴力的に侵略しつつ、ついには世界の民主主義諸国家と無謀な戦争をひき起こすといった

状況に直面したときには、かれ自身が「抵抗の知識人」として活躍した。そして、敗戦後に、かれは、日本が民主国家に転生するときの日本人の変わり身の早さと要領の良さ、原理的にものを考えない俗物根性をいやというほどみてとっていた。そうした精神的欠陥を突いて、一九六〇年以降一〇年近く高度成長に安住していた日本人に喝を入れ、「戦後民主主義とは何だったのか」の再検討を迫ったのが一九六九年から七〇年（昭和四四～四五）にかけての全国的規模で展開された大学闘争であつた。近代日本における民主主義の父如是閑がこの真っ只中で亡くなっているのはなんと象徴的なことではないか。しかも、その後も日本は「民主改革の精神」を忘れ、「バブル経済」に酔いしれ、それが、こんにちの現代日本における「時代閉塞」的停滞性を招いているのである。

したがって、如是閑の市民社会論を取りあげるとは、実は、日本近現代史における日本人の原理的思考の欠如の問題性とその克服方法をみいだすための思想的営為の一つであるといつてもよいであろう。

## 一 如是閑の幼年時代——その思想形成

如是閑が、陸羯南「二八五七年（安政四）～一九〇七年（明治四〇）」の主宰する「日本新聞社」に入社したのは、日清戦争勃発一年前の一九〇三年（明治三六）秋のことであり、そのときかれは二七歳「満年齢」であつた。そして、この「日本新聞社」への入社こそが、近代日本最高の思想家長谷川如是閑が誕生する出発点となつた。

当時の高等教育を受けたインテリ青年層の目ざすふつうの立身出世コースからみれば、二七歳という年齢は、かなり遅咲きの感があるが、この六年半ほどの足踏みと待機期間はかれにとつては決して無駄ではなかつた。なぜなら、家の破産による「貧」と生まれつきの「病弱」のための二年間の休学期間をはさむ大学時代、卒業後五年間ほどの自宅療養

時代を通じて、如是閑は、「読書中毒」といわれたほどに古今東西の書物を熱烈学習し、そのことが、かれが社会の木鐸たる新聞記者の道を選択し、そこから次の目標である一個の思想家へと上昇転化しようとする人生の設計図をじっくりと確立していくことを可能にしたからである。

さて、大國清國を打ち負かして、世界の国々を驚かせた「日清戦争」の勝利後、日本資本主義が急速に進展し、明治三〇年代に入ると、日本社会においても他の欧米先進諸国と同様に資本主義の矛盾としての貧困・失業などの「社会・労働問題」が顕在化し、それと薩長藩閥政府による封建的な専制支配とが重なり合って、社会的不安が急速に広まりかつ高まった。如是閑は、「明治維新」後、「明治啓蒙期」、「自由民権期」、「明治憲法の制定・国会開設」に向けて、全国民がその方法・手段には大きな違いがあつたとはいえ、「官」も「民」も一丸となつて日本の近代化、日本の文明開化に突進していた政治・経済状況とは異なる、新しい時代の出現に直面して、当時のインテリ青年層が抱いていた三種の意識構造について次のように分類している[『ある心の自叙伝』、一九五〇年(昭和三五)]。

第一のタイプは、陸羯南・三宅雪嶺流の日本の封建制を克服して、どのようにして近代国家を作るかと思索していた国民主義的グループ、第二のタイプは、安部磯雄・木下尚江・大山郁夫・河上肇あるいは幸徳秋水など、社会主義によつて政治的・社会的解放を求めていた権力抵抗型、第三のタイプは資本主義の矛盾を体験し、それについて懐疑しあるいは煩悶していた人びと、そして煩悶型のシンボルは「嚴頭の感」(人生不可解)を書いて「華嚴の瀧」に身を投じた[「一九〇三年(明治三六)」藤村操であり、懷疑型のシンボルは「時代閑塞の現状」を書いた「一九一〇年(明治四三)」石川啄木である。如是閑自身は、当時は(日本新聞社入社頃)第一のタイプに属していたが、「後期」大正デモクラシー期(第一次世界大戦の始まつた一九一五・六年頃から満州事変の始まつた一九三一年頃まで)には第二のタイプに接近した、と述べている。そして、こうした如是閑の思想的転化の推移(自由国民主義者から「社会的」民主主義者へ)は、当時世界最高の政治思想家・政治学者といわれたイギリスのハラルド・ラスキ(一八九三—一九五〇)よりも一〇

年以上も早いことに気付くであろう。

ところで、第三のタイプについては、如是閑は、家の破産とかれ自身の病弱と闘っているうちに、いつしか、「荒風にも堪えない、繊細な青年」「戦前によく見受けられた「青白きインテリ」の情操を軽蔑し」、「社会を客観的に把握するような青年に自己を改革し、煩悶時代を突破してしまった」、と述べている。

このようにみると、職業としての新聞記者への道に到達するまでの如是閑は、日本に近代国家を創設することを目ざしていた福沢諭吉の自由民主主義や田口卯吉や陸羯南の唱える国民論派に共感していた「インテリ青年」であつたことがわかる。とすれば、かれが、新聞『日本』の編集長古島一雄のすすめによつて、「日本新聞社」に入社したのは、きわめて自然な成り行きであつた、と言えよう。

ところで、当時のほとんどの高学歴青年たちが、立身出世の早道として、我<sup>われ</sup>先にと官僚・軍人・裁判官への道を選び、明治国家体制に吸収されていった時代に、なぜ如是閑は、官僚・軍閥政治を批判することを「至重の職」と考える新聞記者の道を選んだのであろうか。それには、かれの生まれ育ち、教育環境が深く関係している。

如是閑の先祖は、徳川家代々の城大工の棟梁で、家康が幕府を開いたときに三河から江戸に出てきた。明治維新後は、如是閑の父山本徳治郎は、東京下町の深川木場で材木商を営み、一時期は浅草の「花屋敷」などを経営していたから、かなり裕福だったらしい。

こうした三河以来の徳川の配下という出自から、徳治郎は大の官軍・薩長嫌いで、明治政府の作るものにはなんでも反対した。このため如是閑は入学したばかりの公立小学校を退学させられて本島小学校という私立学校に通わされている。一〇歳のときに、如是閑は兄松之助（のち『東京朝日』の社会部長）と共に、シェイクスピアの「マクベス」を日本に最初に紹介したといわれる坪内逍遙「東大法学部卒、明治専門学校（のち早稲田大学）教授（行政法）、『小説神髓』などの出版にさいしては、如是閑の父が援助している」の家塾に入れられ、そこから小学校に通つた。翌年には、スマ



イルズの『西国立志編』(自助論)<sup>セルフ・ヘルプ</sup>やミルの「自由之理」(自由論)<sup>オン・リバティ</sup>などを訳して高名な、のちの東大教授中村正直(敬宇)の「同人社」にも通った。すなわち、如是閑は、一〇歳そこそこにして、福沢と同じく日本最高峰の英米系学者である逍遙と敬宇の薫陶を受けていたことになる。何<sup>な</sup>という幸運な学校生活の門出ではないか。

如是閑が、生涯イギリス的民主主義思想を愛し、日本の藩閥官僚政治や軍閥のイデオロギー思想となったドイツ(プロイセン)型国家主義と闘ったのは、かれが少年時代からイギリス思想に親しんできたからである。伊藤博文、井上馨らによる日本政治の方向をドイツ型憲法・政治体制へと決定づけた「明治一四年(一八八一)の政変」(イギリス派大隈重信参議や福沢派官僚の明治政府からの追放)以後、日本の政治思想が一斉にドイツ思想に傾斜していったなかで、如是閑のように明治・大正・昭和の三代にわたって終始イギリス的民主主義思想を唱え続けた思想家はまれなる存在であつた。

長じて如是閑は一二歳のときに父の意向に従つて代言人(弁護士)になるべく法科に進むことになるが、そのさいにも父徳治郎は、日本の官僚候補生が学ぶドイツ法を嫌い、友人の光妙寺三郎が創立者の一人であつた仏法系の明治法律学校(現明治大学)予科に通わせている。またその年、如是閑は陸羯南と共に「政教社」の同人であつた杉浦重剛が主宰する東京英語学校(現日本学園)にも通学している。

ところで、如是閑はなかなか早熟な少年であつたらしく、予科入学の前年の一八八八年(明治二一)に創刊された陸羯南の「政教社」同人の三宅雪嶺や志賀重昂<sup>しげたか</sup>らの雑誌『日本人』や翌八九年(明治二二)に発行された羯南の主宰する新聞『日本』を定期購読していた。まだ中学生になつたばかりの年齢で十分に読みこなせたかどうかはわからないが、『日本人』や『日本』を読み、杉浦の東京英語学校に在籍したことは、かれがのちに新聞『日本』の記者になる機縁となつたことと無関係ではないだろう。

また如是閑の父親の徳治郎自身はなんの学歴もなかったが、政治や学問にはなかなかに関心があつたらしく、さまざま

まな新聞や雑誌をとっていたようである。如是閑の言によると、父個人は、『朝野新聞』、『報知新聞』などの大隈系の論説新聞「当時論説新聞は『大新聞』と呼ばれていた」をとり、家族のためには『改新新聞』という大隈系の通俗新聞「小説、社会欄などの入った大衆向けのやさしい新聞で『子新聞』といわれ、『朝日』、『毎日』、『読売』は『大新聞』と『子新聞』の中間に位置する新聞であつた」をとり、兄松之助は、『やまと新聞』、『朝日新聞』等の「中立新聞」をとり、如是閑は、新聞『日本』をとっていたようである。そればかりか、如是閑は、『政教社』とは立場の異なる徳富蘇峰の『民友社』系の雑誌『国民之友』（一八八七年刊）や『国民新聞』（一八九〇年刊）を併読していたというから驚きである。さらに一時は歴史学者になろうかと思っていたほどの歴史好きの如是閑は『史学会雑誌』を創刊号から購読していた。これで、如是閑が「本の虫」と呼ばれたほどの読書好きで、知識欲旺盛な少年であつたことがわかるであろう。のちの日本の思想家・大ジャーナリストは、こうした家庭環境の中で育まれたのである。

さて、明治法律学校に入つたものの、周囲は年嵩としかさの者が多く、子供扱いにされたらしく、それに堪え切れずに友人数名と神田錦町にある「英吉利法律学校」（現中央大学）の後身「東京法学院」の予備科に転校、九三年（明治二六）、かれ一六歳のときに同学院英語法学科に入学している。

しかし、当時、父の事業が失敗したので二年間ほど休学し、九六年（明治二九）、家計も好転したので、今度は邦語法学科二年に再入学、九八年（明治三一）に卒業している。席次は二〇〇人中一四番であつた。しかし、卒業はしたものの病弱であつたから、如是閑は研究科に進み、この間、『法学新報』などで刑法にかんする論稿を十篇ほど書いているが、解釈法学にかんするものはなく、法学生は、哲学的原理を探索すべきだとか、法学以外の人文・社会科学を学ぶべきだとか述べている。また如是閑は、犯罪は環境の所産であるとする犯罪社会学に興味を抱いていたようである。ここいらにも、のちの思想家如是閑の姿勢がうかがい知れる。

また如是閑は、生来、ものを書くことが好きだったらしく、中学時代に『少年園』という雑誌に「道灌山」あた辺りを散

策した風景を記した「そぞろ歩き」という一文を投稿している。そして、この「少年園」からは、もう一つ投書専門の『文章』という雑誌がでていて、そこに投書し、採用されることが当時の秀才少年たちの登龍門とみなされていたが、この投書少年のなかに、のちに学者やジャーナリストの世界で有名となった吉野作造、大山郁夫、牧野英一、千葉亀雄、河井醉名らの名前がみられるのは興味深い。如是閑自身は、こういう高名争いのような競技への参加は好きでなかった、と述べている。

いずれにせよ、如是閑は、一八九八年（明治三一）以後、父の願いでもあつた法律家あるいは法学者への道は性に合わないとしてきつぱりと断念し、新聞記者の道を目ざして、『日本』、『東京朝日』、『精神界』などの新聞や雑誌に、『某投』、『なにがし』、『胡恋』、『長谷川胡蓮』などのペンネームで精力的に投稿活動をしている。そのテーマは、上流社会の墮落、政界の腐敗、異常な投機熱、自殺、殺人、罪人、虚無党などにかんするものが多く、そのため如是閑は、当時、周囲からは、「ニヒリスト」、「アナーキスト」とか呼ばれていたようである。いい若い者が、年中、家でブラブラしていたので「変人扱い」の目でみられていたのかも知れない。しかし、この時期如是閑は知識の「本源的蓄積」のために熱烈学習し、その成果のもとで、明治三〇年代に入って顕在化しはじめていた日本資本主義社会にひそむ暗い影の部分をも鋭く見抜いていたのである。

## 二 新聞『日本』の時代

——自由民主主義者として——

如是閑が新聞『日本』に在籍したのは、一九〇三年（明治三六）の秋から一九〇六年（明治三九）に陸羯南が病気の

ため引退し、銀行員出身の伊藤欣亮に経営権を譲つたために、社主と編集記者たちとの編集方針が合わなくなり、二三名中二二名の社員が退社するまでの約三年間と短かった。その間、如是閑は、ときに署名原稿を書くか、コラム欄や短評を書いた以外にはさしたる目立つた活動をしていない。多くは編集室の片隅で読書していたから、羯南が編集長の古島一雄に「変つてゐるね」と目くばせしたという話も伝わっている。また如是閑が羯南とどの位接触したかもわからない。しかし、ここで重要なのは、如是閑がなぜ「日本新聞社」を最初の職場として選んだのか、ということである。それは、かれが、羯南の政治思想にひかれたからである。

では羯南の思想とはなにか。この点については、羯南が一八九一年（明治二四）に書いた『近時政論考』が最もわかりやすい。羯南は、この本の中で自分たちの新しい立場を、欧化主義的色彩の強い福沢らの富国派や西洋文明にたいする日本文明の絶対的優位を説く高山樗牛らの排外主義的ナショナリズムと区別して「国民論派」とネーミングしている。そして、この国民主義とは、欧米の良きものはこれを摂取するが、日本の伝統のなかで良きものはこれを保守し発展させ、これによつて対外的には「国民『国家』の特立『独立』」を守り、対内的には「国民の統一」をはかり、国家の安定と国民の自由を保障するものである、と述べている。ここで、羯南が「国民の特立」・「国民の統一」といつて国家という言葉を使っていないことに注目しよう。

ところで、如是閑が、福沢の本を読んでいたことは間違いないと思われるが、自分が生まれた年に発行されている『文明論之概略』よりも、多感な青少年期に読んだ『近時政論考』のほうが如是閑にとつて断然インパクトがあったと思われる。事実、明治二〇年代に入ると福沢の思想家としての影響力は急速に下落していたようで、田口卯吉や陸羯南の著書には福沢の名前がほとんどでてこないし、如是閑の著書・論文でも福沢の言及がほとんどないのはそのためであろうか。恐らく、明治二〇年代以降福沢の著作に現状批判的な言説がほとんどみられなくなったことが、当時の青年たちの「福沢離れ」の理由ではなかったかと思われる。

要するに如是閑は、羯南の国民主義ナショナルイズム（羯南は極端な国民主義は国家主義に陥ると警告している）と自由主義リベラリズムの同時併立を目ざす立場に共鳴し、羯南のもとに馳せ参じたものといつてよいだろう。そして、このような国民論派の政治思想こそ、ホップズの「政治社会」シヴィル・ソサィエティ（自己保存最優先主義）論やスミスの「市民社会」シヴィル・ソサィエティ（商業共和国）論にみられる「人權と自由」を第一義的なものとする近代民主主義思想の「日本版」ではなかったか。

ところで、如是閑の『日本』入社には大きな附加価値がついた。先輩に三宅雪嶺、古島一雄、同僚に千葉亀雄、安藤正純（鉄腸）、河東乗五郎（碧梧桐）、丸山幹治（侃堂）、井上亀六（舊村）など、のちの明治・大正・昭和にかけて活躍する錚々たる逸材が机を並べていたからである。編集室の風景は、自由な雰囲気による談論風説（如是閑）、『水滸伝』における「梁山泊」の寄り合いを思わせる観があった（安藤正純）。なかでも、如是閑は、安藤正純・丸山幹治と気が合ったようで、のちにこの三人は、大正デモクラシー運動の拠点となる「大阪朝日新聞社」に再度結集することになる。ちなみに如是閑（かくのごとくひまなり）という雅号は、井上亀六（丸山真男の母セイの異父兄）が、「君は余り忙しそうにしているから、少し閑になる呪いまじなに」とすすめられたことによる。

さて「日本新聞社」を退社し、三宅雪嶺、古島一雄らの雑誌『日本及日本人』に移った翌年（一九〇八年（明治四一）（二月））に、そのときすでに移籍していた安藤の紹介で知己をえた元『日本』記者で、現『大阪朝日』編集長鳥居赫雄（素川）のすすめで「大朝」に入社する。ウオーミング・アップは十分過ぎるほど仕上がっていた。「大朝」というネーション・ワイドな活躍の場をえて、長谷川如是閑がジャーナリズム界のエースの地位に駆け上がるまでにはさほど時間はかからなかった。

### 三 「大朝」時代——国家権力との衝突

如是閑の「大朝」時代は、かれ三一歳から四一歳までのわずか一〇年と八カ月にすぎなかった。罷め<sup>や</sup>めたときのポストは社会部長（当時は政治部以外の分野はすべて社会部が担当した）であつた。

「大朝」時代は決して長くはなかつたが、ここでの記者生活の経験と編集者としての知的訓練を抜きにしては、とうてい、「大朝」退社後における啓蒙思想家・実践運動家如是閑の目ざましい活躍を考えることはできないであろう。なぜなら、如是閑は「朝日」というネーション・ワイドな大組織に身をおくことによつて、一つには、第一次世界大戦後の新しい時代を先導する多数のすぐれた学者・知識人と知り合う機会をえ、一つには、ペンや思想の力による啓蒙活動の意義と社会正義実現の方法的可能性を学ぶことができたからである。

また社長村山龍平は、かねてより「新聞をやがて来るべきデモクラシー時代の先駆的役割をもつものになりたい希望をもつていた（如是閑「世界の歴史と自分の歴史」、『玄想』、一九四七年九月・一〇月号）ため一流の知見の士を盛んに東西「朝日」に集める方針をとつた（たとえば大阪に高橋健三、鳥居素川、安藤正純、東京に池辺三山、杉村楚人冠、杉浦重剛など。かれらはすべて『日本』の自由主義の流れをくむOBたちであつた）。如是閑もそうした一連の流れのなかで「大朝」に入社するが、その前年「一九〇六年（明治四〇年）四月に、文学界の大立者・東大講師夏目漱石が、池辺三山の執拗なねばりによつて「東京朝日」に入社し（日給二〇〇円、大学の給料は七〇円）、「大学屋が新聞屋に変わった」として世間の注目を浴びた」。如是閑の最初の仕事は漱石の小説「虞美人草」にたいする辛口の書評であり、他方漱石は、如是閑が「大朝」入社二年後に書いた「？」なる奇妙なタイトルの新聞小説「一九〇九年（明治四二年）三

月二二日、五月七日に完結、『大阪朝日』に連載。同年八月に政教社より『額の男』として出版」の書評を書いて、この小説には全篇にわたってオビニオンがある「この小説の内容は、法学生がいかに頭デッカチであるかを痛烈に批判したもの」と激賞している、これには後日談があつて、如是閑に興味を抱いた大文学者が、わざわざ如是閑に会いに大阪の如是閑宅（天下茶屋）に出向き、突然の来訪の連絡を受けた如是閑が急遽帰宅したとのことである。もう一つ述べれば、この『額の男』を読んで、当時東大法学部に在籍していた、法律ほどつまらないものはないと思つていた辰野隆が、この『額の男』を読んで、中学生の谷川徹三が法学部ではなく文学部の哲学部に進学した、というエピソードがある。また一高生であつた当時新聞記者志望の羽仁五郎が、如是閑を理想の人物としていたというから、如是閑の大物振りがわかるうというものである。

さて、如是閑は、入社翌年の八月以降早くも「社説」や「天声人語」などの「硬派」ものを数編書いている。しかし、かれが、政治批判的「社説」や「天声人語」を書きはじめるのは入社三年目の一九一一年からで、この年如是閑は、大逆事件の大審院判決「一九一〇年（明治四三）二月一日、大審院、幸徳秋水ら二六人にたいする大逆事件の公判開始、翌年一月一八日に、二四人に死刑判決」や京大教授岡村司博士の講演問題「明治憲法下の家族制度を批判して一九一一年（明治四四）に懲戒免職になった」にかんして、政府の言論・思想取り締まり政策の不当性をきびしく批判している。こうして如是閑は、新聞記者の出発点においてまず最初に民主主義にとって最も基本的に重要な「言論・思想の自由」をめぐつて政府や司法当局と対面することになる。

ところで如是閑は、入社二年目の一九一〇年（明治四三）三月に約八ヶ月間、「日英博覧会」の特派員としてイギリス、ヨーロッパを回遊している。ベルリンでは、文部省留學生で「大阪朝日」の通信員であつた佐々木惣一「のち京大法学部教授、京大（滝川）事件で免官される」と面識をえ（この頃、吉野作造も欧米に留学している）、これが機縁となつて、一九一五年（大正四）に如是閑は、佐々木を河上肇と共に「朝日」の社友に迎えている。またロンドンでは、

若き日の小泉信三（のち慶応大学塾長）に出会い、『共産党宣言』ぐらいは読むようにとすすめ、それが帰国後最初のゼミのテキストにとりあげられ、そのゼミ生に野坂参三がいた、といわれている。

ところで、一九一四年（大正三）二月に、数年前から「大阪朝日」の内部で底流となっていた新聞『日本』つまり「政教社グループ」の流れをくむ自由主義的な鳥居素川派と国家主義的な西村天因派との対立が爆発した。この対立は結局は鳥居派の勝利という形でおさまり、やがて鳥居素川が編集部長、長谷川如是閑が社会課長に任命され、ここに鳥居・長谷川編集体制ができあがり、以後一九一八年（大正七）一〇月に「白虹事件」の責任をとって鳥居・長谷川が退任するまでの約四年半ほど「大阪朝日」は、大正デモクラシーを先導する地位につく。

たとえば、一九一五年（大正四）五月に如是閑は、京大教授佐々木惣一、河上肇、末広重恭らを社友に迎え、佐々木は、一六年（大正五）一月一〇日から一九日まで「立憲・非立憲<sup>ひりつげん</sup>」[この年一月、吉野作造が『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を発表しているが、この佐々木・吉野論文こそが大正デモクラシー出発進のノロシとなったといえないだろうか。またタイトルの「非立憲」という語は、明治の頃から暴政を批判する用語として使われていた。そして、この「非立憲」という語は、この年一〇月に内閣を組閣した陸軍大将寺内正毅が、その後一八年（大正七）七月からの米騒動、八月のシベリア出兵にさいして、それを批判した国民運動を弾圧した暴政に結びつけられ、また寺内の頭がキューピーの頭に似た「ツルツッぱげ」であり、当時の人びとは、キューピーの頭を「ピリケン頭<sup>あたま</sup>」と呼んでいたの、寺内内閣のことを「寺内ピリケン内閣」と呼んだ」を書き、河上は九月一日より一二月二六日まで『貧乏物語』を連載し、ここに「政治改革」と「社会改革」を標榜する『大阪朝日』の論調が明確化された。

そして、一七年（大正六）四月には、河上肇の弟分と目され、如是閑のマルクス主義研究の教師といわれる櫛田民蔵が、一二月には、のちに雑誌『我等』・『批判』に立てこもり、狂暴なる国家主義やファシズムと共同戦線を張って戦う盟友となる大山郁夫が「大朝」に入社する。また鳥居・長谷川編集体制が確立された一九一五年（大正四）に、如是閑



は、翌年の『中公』一月号に「憲政の本義を説いて……」なる論文を書いて、一躍「大正デモクラシー」のシンボルの存在となった民本主義者吉野作造と阪神電車の中内ではじめて出会っている（吉野作造、佐々木惣一と親交のある今井嘉幸の紹介）。このとき、大正デモクラシー運動の思想的御三家、長谷川如是閑、吉野作造、大山郁夫のネットワークが形成される基盤ができたのである。

こうして如是閑は着々と「大正デモクラシー時代」の絢爛たる知識人群像との親交の輪を広げつつ、「大阪朝日」という桧舞台に立つて自由主義・民主主義を啓蒙する活動に打ってでる。しかし、如是閑の意図はそうは長続きはしなかった。なぜなら鳥居・長谷川体制をくつがえす、とくに如是閑を追い落とすチャンスが意外にも早く到来したからである。

一九一八年（大正七）八月二六日『大阪朝日新聞』夕刊記事中に「白虹日を貫く」という不穏当な言葉あり、として当局側が、筆者の若い大西利夫記者と発行名義人山口信雄を秩序紊乱の罪で告発し、そのことは、鳥居編集長・長谷川社会部長「如是閑は一九一六年（大正五）十二月一日に社会部長になった」が退陣しなければ『大阪朝日新聞』を発行禁止処分にするという危機的状況に追い込んだ。

これが世に有名な「白虹事件」「同年七月に起こった「米騒動」への寺内正毅内閣の対応策に抗議して「寺内内閣弾劾関西新聞記者大会」（こんにちでは想像もつかないだろうが、大正デモクラシーを先導したのは、各新聞社の記者たちであった。かれらは、この時期、政府批判の集会を各地で開き、デモクラシー運動の先頭に立った）が開かれ、その報告記事中に「白虹日を貫けり」（『史記鄒陽伝』にでてくる言葉。白い虹が太陽を貫くことで、中国では昔、国に兵乱のある兇兆とされた。白虹は兵の象、日は君主の象）という文言があり、これを政府当局は、日本の滅亡を予兆する言葉ひいては皇室にたいする不敬罪として問題にした。

こうして「大阪朝日」は、寺内内閣とそれに続く原敬内閣に全面降伏し、鳥居素川、長谷川如是閑の首を差しだすこ

とで社の存続をはかった（これについて如是閑は、のちに営業新聞の立場としてはやむをえないことだった、と淡々と語っている）。このとき調査部長花田大五郎、通信部長丸山幹治、外信部長稲原勝治、論説記者大山郁夫、井口孝親、客員論説記者柳田民蔵らも連袂退社する。「東京朝日」でも松山忠次郎（のち読売新聞社長、経済評論家）、大庭柯公らが「大朝」に殉じた。

#### 四 『大阪朝日』（新聞）から『我等』（雑誌）へ

一九一九年（大正八）二月一日、如是閑は、大山郁夫、井口孝親らと「我等社」を設立、集団雑誌『我等』を創刊した。

この年、『社会問題研究』（河上肇）、『社会主義研究』（堺利彦、山川均）、『改造』（山本実彦）、『解放』（顧問福田徳三）、『労働運動』（大杉栄、和田久太郎）などの急進的・社会主義的立場をとる雑誌が続々と創刊されている。これは、第一次世界大戦後の国際的な「改造」と「平和」の気運に触発されたものといえよう。もつとも、これらの雑誌のなかで長続したのは、『我等』（のち『批判』と改題）と『改造』だけである。

ところで、「大朝」を辞任したのち、如是閑たちは、自分たちの今後とるべき道についてあれこれ思案している。鳥居は、新しい新聞社の設立を目ざしたが、資金面で断念した。また丸山幹治のように、「朝日」以外の大新聞『毎日新聞』に入社して闘争を続行する道もとられた。しかし、如是閑と大山は、啓蒙雑誌『我等』を創刊する方向をとった。雑誌は新聞の影響力とは比較にならないほど小さいことはわかっていたが、いまや商業新聞化している大新聞では政府批判にかかわる思想や理論を展開できないデメリットがあることを承知していたから、小出版社ではあれ、自由に発言

できる「我等社」創立を目ざしたのである。

では、啓蒙雑誌としての『我等』の立場と闘争の方法はいかなるものであったか。これについては、如是閑の署名入りの『我等』創刊号冒頭の長大論文「『大阪朝日』から『我等』へ」のなかで明確に示されている。以下、その論点について述べる。

一、まず如是閑は、人間的な生活のない、現実を克服するために人間らしさを求めて自覚の旅路を歩みはじめたことを宣言し、そうした目的を達成するための闘争手段としては、当面の敵である国家主義者たちが用いる暴力的圧力に断乎として反対する意味から平和的な理論闘争の方法をとることを明言している。

当時のきびしい状況をリアリスティックに計算に入れ、如是閑が、啓蒙活動の方法をリアリスティックなまでに「言論戦」に限定し、「直接行動」ではなく、いわば「搦手」から敵を攻める方法をとったこと、すなわち、自分の立場を「中衛の位置」に定めたことが、その後一五年もの長きにわたって雑誌発行を継続できた理由の一つであった。そして、こうした方法こそ、かれが幼年時代から学んできた、自由な言論を積み重ねて正しい結論に到達し、それによって多数の支持者を獲得していくイギリス的な市民社会論的発想方法といえよう。

二、では如是閑は、なににたいして思想闘争を展開しようというのか。それは、「白虹事件」で一敗地に塗れた、かの強暴な「固陋なる国家主義」にたいしてであった。では、「固陋なる国家主義」とはなにか。ここで如是閑は、それは「我が国家を唯一絶対至上のものと信じる信念」、「そういう信仰から我が国家に、国家集団〔国家内のさまざまな民間の社会、集団のこと〕の利益を超越した単一無二の道德的価値を有する〔神国日本〕」、超国家主義的の見地をとる強権的・排外主義的国家観である」と述べている。そして、こうした考えは、国内的には、「国家の安寧と国家生活の平和のために極めて危険であり」、国際的には、「国家共存の世界に於て」、「物質的孤立、精神的孤立に陥れるものである」と如是閑は警告を発している。これこそ、一九三〇年代以降の日本におけるファシズムや「八紘一宇」をかかげるアジ

ア侵略政策の思想的発条となったものではなかったか。そして、これらの思想を阻止する闘いに、日本国民が失敗したとき、日本は一九四一年に「太平洋戦争」に突入し、最終的には一九四五年の悲惨な敗戦を迎えるのである。

三、このように敵を明示したのち、如是閑は「固陋なる国家主義」にたいして「あるべき国家主義」を提示している。ここで如是閑が「国家主義」というタームを使っているのは奇妙に思われるかも知れないが、これは敵の主要概念である「国家主義」を逆手にとつて敵の攻撃の鋒先をかわそうというものであろう。しかしこの国家主義なる語は当然のことながら政府当局と如是閑とではその内容が異なる。当局のばあいは文字通り国家万能主義その結果としての国家権力の個人自由にたいする絶対的優位を説く政治思想であり、これを英米系の政治学では「ステイティズム」(statism)と呼んでいる。他方如是閑のイメージする国家主義とはアメリカ「独立宣言」やフランス「人権宣言」にみられるような「健全なる国民主義」(nationalism)のことで、その内容については如是閑は次のように述べている。

まず国内政治にかんしていえば、「其の政治が、啻に人民の意志を尊重し、其の意志の参加を原則として認めているばかりではなく、政治の實際に於て、有効に参加せしめ得る組織を持った国家」構想であり、この立場によれば、「万機公論に決す」という「御誓文の精神」にもみられるように、「日本という君主国に於ても民意を本とした政治」の實現は可能である、と如是閑はいう。こうした政治批判の方法は、吉野作造や美濃部達吉らの「天皇の存在と民意を重視する民本主義は両立しうる」という考え方を踏襲している点では似ているが、官僚・軍閥政府と断乎として闘うという姿勢において、「無官の大夫」如是閑と官立大学教授とでは比較にならない。さらに、如是閑が吉野や美濃部よりも一歩先きんじていると思われる点は、一国民民主主義の問題をたんに「憲政の運用」の問題に局限することなくインターナショナルイズムと結びつけて考察している点である。如是閑はいう。「……国家は……国外的には、他国の国民的意志を尊重し、国家集団「国家内集団としての社会集団」の生活を道徳的ならしむる共同の目的を持ったものでなければならぬ」、「……強大なる国家の意志のみが、世界の全体の上に働いて、自余の国民の存在は、そういう強大国の任意の慈

恵によるというような状態では、到底、世界的人道は成り立ち得るものではない。人道が成り立ち得ない世界は、決して平和の世界ではない」。

第一次世界大戦後の敗戦国でかついわゆる先進民主主義国家と目されたイギリスやフランスですら、如是閑がのちに批判しているように、戦後になつても依然として世界平和の意義を十分に理解できず、国際連盟を国家利益の角逐の場<sup>ナショナル・インクレスト</sup>に利用し、帝国主義的侵略政策や軍拡競争に狂奔し、結局は第二次世界大戦の勃発を阻止できなかったのだから、如是閑の平和主義の覚醒と大国主義批判が当時としては、いかに進んだものであつたかがわかるであらう。

こうして如是閑は、後期大正デモクラシー運動の先頭に立つべき『我等』を創刊したが、そのさい、かれは、自己保存（生命の尊重と生活の安定）と自由を保障し、そのためにも国際平和を確保するために闘うことを宣言したのである。そして、この自由・平等・平和の実現こそまさに「市民社会論」の精神原理そのものであつた。

## 五 国家主義に抗して——国家の道徳的批判から構造的批判へ

如是閑は、『我等』を拠点に、日本において自由・平等・平和な社会を実現するために「固陋なる国家主義」との闘争を開始した。もつともこの「固陋なる国家主義」にもとづいて構築された強暴なる国家権力と闘うことは尋常一様なことではなかつた。

このため如是閑は、「大朝」時代に形成した広汎な自由主義的・民主主義的知識人のネットワークをふんだんに利用しつつ、「国家主義」にかかわるあらゆる問題を取りあげ——ときには「特集」の形で——、そればかりか、かれ自身が編集責任者として国家主義と対決する長大な論説を毎号のように書いている。たとえば、かれは、主要テーマである

「国家論」についてだけでなく、「社会論」、「憲政（議会政治、内閣制度）論」、「政党論」、「労働組合論」、「無産者運動論」、「資本主義（私有財産制）論」、「社会主義論」、「国際政治（国際連盟）論」、「アジア（朝鮮・中国・満州）論」、「教育（学問の自由・大学自治・学生問題）論」、「歴史論」、「道德（性・風俗）論」、「女性（フェミニズム）論」、「家族制度（結婚・離婚）論」、「芸術（文学・演劇・映画）論」、「新聞（マス・コミ）論」、「日本文化論」、「ファシズム論」など、およそ人間社会において生起するあらゆる問題について論じている。かれの生涯著作が数百冊、論説・評論・エッセイなどが三千本と超多作であるのは、かれが、ホームグラウンドである『我等』（『批判』）はもとよりのこと、戦前・戦後にわたり、『朝日』、『毎日』、『読売』などの三大新聞、『中公』、『改造』、『文春』、『思想』、『世界』などの主要雑誌を通じて、果敢に啓蒙活動を続けてきたからである。そして、こうした問題解明のための知識は、ほとんどすべて、自分自身で独習したものであり、ホップズ、ロック、ルソー、スミス、マルクス、ヴェーバー、ラスキのような人物もまたこうした習得を実践した世界の大思想家であつたといえよう。

如是閑が、大宅壮一によつてアンシクロペディスト、文化的マーケットとネーミングされ、また同時代人たちによつて、ヴォルテール（谷川徹三）、アナトール・フランス（藤森成吉）、ロマン・ローラン（秋田雨雀）、バーナード・ショウ（水島雨保布）、H・G・ウェールズ（室伏高信）などと対比されて「文明批評家」と呼ばれたのは故なしとしい。しかし、この限られた紙数では、そのすべてにわたつて述べることはとうてい不可能であるので、ここでは、かれの主要打撃目標であつた「固陋なる国家主義」との論戦についてだけ述べるにとどめる。

## （二）国家の道徳的批判——リベラル・デモクラシーの視点から

マルクスは「ヘーゲル国法学批判」、「ユダヤ人問題によせて」から、「賃労働と資本」、「共産党宣言」に至るまで、

わずか五・六年のあいだに、はじめは「道徳的・理想主義的哲学」つまり「リベラル・デモクラット」の立場からプロイセン国家、広義には国家それ自体の「国家悪」を批判し、次いで資本主義国家の構造それ自体を批判して社会主義的政治・経済学を構築した。

如是閑も、『我等』創刊から大正末年（一九二六）に至る七・八年のあいだに、マルクスと同じく「如是閑はマルクス主義を樺田民蔵から学んでいる」、最初は、国家を宗教的・道徳的性格を有するものとして説明する「官憲的国家主義」を批判しつつ、最終的には資本主義国家の矛盾をあばきだしながら、労働者階級を中心とする「社会国家」「こんにちの福祉国家をイメージしたもの」の構想を提起するまでになった。

ところで、「固陋なる国家主義」の根底にあるのは「天皇信仰」・「天皇神聖」論である。そして、この問題を考究・発表することは、戦前の日本では生命の危険にまでかわかるアンタツチャブルな問題であった。しかし、それに切り込むことなしには「固陋なる国家主義」の本質を解明することもできないし、そのイデオロギーを粉碎することもできない。

では如是閑はどうしたか。かれは目的達成のためには、さまざまな手段を考案し、無益な玉砕を避けるために、ときには柔軟なイギリス流思考にならつて——たとえば、ピューリタン革命期の人民蜂起の恐怖を緩和しつつ議会権力を確立するために、ロックは、「議会主権」というタームを用いずに「議会の最高権力性」というタームを用い、またフランス革命期のルソー的人民主権論を連想させる選挙権の拡大運動を恐れる支配層に受け入れられやすいように、ベンサムが「最大多数の最大幸福」というタームを用いて事実上の普通選挙権を主張した点に留意せよ——「迂回戦術」、「搦手戦法」をとつて「天皇信仰」・「天皇神聖」論に根拠をおく「固陋なる国家主義」批判をおこなっている。

いうまでもなく、日本の国家主義は、天皇の「人格化」による国家への絶対的帰依と服従を要求し、また国家の絶対化によつて国家のなかに個人を埋没させ、ひいては人道の蔑視、国際平和の否定につながる軍国主義を助長させる点に

その特色がある。

このことを如是閑は、ロンドン大学社会学教授ホプハウス（一八六四～一九二九）が出版したばかり（一九一八年）の『国家の形而上学』を素早く手に入れ「如是閑がいかに国内外の研究書や新聞に目くばりしていたかに注意せよ」、二回にわたって『我等』誌上で紹介している。「ヘーゲル派の自由意志論と国家——哲学的国家観に対するホプハウスの教授の批判を紹介する」（『我等』第二巻第一号、一九二〇年一月）、『絶対的国家論に対する社会学的批判——ホプハウスの教授の絶対国家論の批判』（『我等』第二巻第二号、一九二〇年二月）。

第一次世界大戦中には、イギリスのような国でさえ国家権力の強大化を正当化する必要に迫まれ、ヘーゲル国家哲学を導入したセント・アンドリュース大学哲学教授ボーズンキット（一八四八～一九二三）の国家主義がもてはやされた。「一九世紀末の八〇年代に、社会政策や社会福祉を实行する問題をめぐって、「全体」・「公共」の利益のために国家が「私益」や「私的自由」を抑制することを正当化するためオクスフォード大学哲学教授トマス・ヒル・グリーンがヘーゲル哲学を導入している（「消極的自由」から「積極（強制）的自由」へ）。しかし、このグリーンの「強制的自由論」を、グリーンの弟子であるボーズンキットは、国家主義的方向へ導き、他方、ホプハウスは、社会民主主義と福祉国家論を結びつけて論じている」。

このため多元的国家論者ホプハウスは、この時期、ボーズンキット批判、ヘーゲル国家哲学批判をおこなったのである。ここでホプハウスが批判していることは、ヘーゲル哲学の「国家を絶対視する思想は、人権や自由を軽視し軍国主義につながる、」という点であった。

そして、ホプハウスは、この本のなかで、これまでヘーゲルの国家哲学を軽視してきたことを自己批判している。しかし、ホプハウスの批判にもかかわらず、一九二〇・三〇年代に「全般的危機の状況」が高まると、イギリスにおいてすら国家主義的傾向が強まった。このため、ホプハウスの後継者ラスキは、独伊におけるファッショ政権の確立やイギ



リスにおけるモーズリー一派のファシスト運動の跳梁をみた一九三五年（昭和一〇）の時点で名著『国家』を書き、その冒頭部分でホブハウスの『国家の形而上学』を引用しつつ自由主義・民主主義の擁護に努めたのであった。とすれば、如是閑がラスキよりも一五年以上も早く、ホブハウスの提起した問題の重要性を見抜き、それを日本に紹介していたことは十分に評価されてよいだろう。

そして、日本のように、ドイツの国家哲学が、天皇の神聖不可侵を唱える日本の絶対主義国家論の補強物となっていたところでは、ヘーゲル国家哲学を攻撃したイギリスの政治学者ホブハウスの所論を紹介したことは、日本の絶対主義的国家論を側面から攻撃する方法としてはきわめて有効であつたろう。

ところで如是閑は、英米系の外国書による絶対主義的国家の道德的批判を紹介すると同時に、かれ自身も、日本国家の自由化・民主化に向けての具体的な国家像を提案している。たとえば、『我等』第一巻第四号（一九一八・四）に「国家意識の社会化」なる論文を書き、国家の進化「進歩、自由化・民主化の拡大」を求める国家意識の覚醒を妨げているのは、国家をそれ自体善なるものとする旧国家思想の持主たちすなわち官僚・政党であるとして、国家を、「社会的生活」に価値をおく「社会化」の方向に沿って進化せしめよ、と述べている。当時、官僚側は、この「社会化」という言葉によって、「社会政策」とか「社会立法」をイメージさせていたが、如是閑は、自分のいう「社会化」とは、このような「上からの」恩恵的な「協調主義」とは異なると述べているのは、「敵」が用いるのと同じ「社会化」というタームを用いて「敵」を叩くという如是閑一流の戦法と言えよう。

また如是閑は、「我が現代政治に於ける世界的傾向」（『我等』第二巻第四号、一九二〇・四）では、「大学で」ドイツ流の学問をした「ヘーゲル国法学を学んだ」守旧派の人々が、国家の価値を誇大に信じ、君主を神聖不可侵の専制者に仕立て上げ、天皇の意志を利用している「天皇を批判するのではなく、天皇制国家思想や構造を批判するやり方は、如是閑の師である陸羯南などにもみられる」として「固陋なる国家主義者」たちを批判している。そして、こうした状況

が生じたのは、ヨーロッパでは中産階級が近代国家建設の中心となったのに対し、わが国では、官僚や政治家たちが、ヨーロッパの中産階級が有したような自由解放「の精神」を味わうことなく、官僚・政党のメンバーとなって政府を形成し、大資本「独占資本」を保護し、軍国主義活動をおこなっているためだ、またこのことが、ひいては、わが国において議会が無価値なものとされ、言論その他の人権「の保障」を空名にしている理由である、と如是閑は述べている。では、日本改造の具体的方法とはなにか。ここで如是閑は「社会化」をはかる最良の方法としては、普通選挙によって労働者階級の進出を許し、労働組合の結成を認めることが必至であると述べている。

『我等』創刊二年目で、早くも如是閑は、政治的民主化要求の達成「護憲運動」を当面の目標とするリベラル・デモクラシーから、「社会的生活」に価値をおく国家の「社会化」をはかれというソーシヤル・デモクラシー「マルクス主義的な共産主義コミュニズムや社会主義ソーシヤリズムと、イギリス的社会民主主義をミックスした「社会的」民主主義」へと方向転換をはかりつつあった。

## （二）国家の構造的批判——「社会的」民主主義の視点から

戦前の日本の思想家たちが直面した最大の難問は、「主権者である天皇」と「民主主義」・「民主政治」との関係にどう折合いをつけるかということであった。

伊藤博文は、議会政治や政党政治を唱える大隈重信の思想は、「天皇親政」をにかけて王政復古を実現した「明治創業の精神」を否定するものと激しく批判した。ましてや、資本主義の発展による労働者階級の台頭に官僚・資本家層が危機感をつのらせていた大正デモクラシーの時代に入ると、自由主義や民主主義は「天皇親政」を否定する思想や運動と同一であると喧伝されたから、当時の思想家や政治・社会運動家にとって「天皇問題」は最大の難問であった。吉野

作造が、民主主義という言葉はデモクラシーを連想させ、デモクラシーとは「人民主権」の意味だから「天皇親政」と矛盾するので、わざわざ「人民の生活と幸福」を基本とする政治を目ざすという「民本主義」という語を使ったり、如是閑自身も、「白虹事件」では、「白虹日を貫けり」というフレーズは国に不吉なことが起こることを予示したもので、それはとりもなおさず、皇室にたいする不敬罪にあたるとして、その責めを負って職を辞したばかりであった。それ故、如是閑はとくに天皇問題の取り扱いについては慎重であつたように思われる。先ほどの二論文においても、かれは、歴史上、君主と国民の衝突などなく、日本の改革は、「大化」・「建武」・「明治」といづれも「皇室と国民」の共同作業であつた、と述べ、天皇と天皇を利用している国家主義者とを区別しているが、このやり方は、「天皇の威を籍る」「陸羯南の言葉」という形で、薩長藩閥の専制支配を批判するばあいに多用されたが、如是閑もこの方法を踏襲したもののといえよう。またこうしたやり方は、明治維新のさいに、薩長と幕府のいづれが「玉」(天皇)を手に入れるか、昭和維新のさいに青年将校たちが高級官僚や政党幹部や資本家層を排除して直接天皇を奉戴しようとした行動と類似した日本独特の政治闘争方式といえよう。

しかし、『我等』発刊後二年間の日本社会における労働者・農民階級の急激な力の増強にも支えられて、『我等』創刊三年目からは、如是閑は、皇室にかんして「奴隸の言葉」を用いることなく、「生活事実の重視」という社会学的国家論を用いて、国家主義や国家悪や資本主義国家それ自体の批判をおこなっている。

すなわち、如是閑は「国家の商人化と政治否定」(『我等』第三巻第一号、一九二一、一)において、こんにちの政治的調整は、個人や階級利益を中心とする勢力移動によつて保持され、多数決制は多数者独裁となり、政党は専制化の機関として、民衆的政治を少数者専制へと移行させる鈍直<sup>いなお</sup>しの手続きにすぎない。そこで、いまや政治家は商人となり、裁判は商人国家の意志の履行者となっている、として資本主義と政治支配者との癒着をあばいている。

続いてかれは、資本主義の行きづまりが「政治の否定」「直接行動、テロ行為」という気運を生みだしてくる、とい

う資本主義の病理現象を剔出してゐる。またかれは、「革新」的な社会・経済思想は、いかなる支配が次にくるかを考察し、「改造」は「社会的」になされなければならないとして、社会科学の使命と目標を明示している。さらにかれは、「改造」や「革新」を目ざす言論・思想は、現存社会組織の必然的結果として起こつたものであるから、根本を正すことなく、官憲がただいたずらに言論や思想に弾圧を加えることは無意味であるとして、当時の社会改良・社会革命側の思想や言論の自由を支持している。

では、だが「社会化への道」を担うのか。これについては如是閑は「現代運動としての社会的態度」（『我等』第四卷第九号、一九二二・九）において、「現代の運動とは現実の客観的条件を見出して在来の原理による生活組織に代らしめようとする運動」であるとして、これを如是閑は「社会的態度」と呼んでいる。またかれは、この最も有効な行動上の方法は「団体行動」で、かれはこれを「自然権」と述べ、現代運動の中心は労働者・小作人などの生産階級であり、知識階級は「社会的態度」の科学的条件を発見することによつて生産階級と共同するものであると、述べている。以上の二論文には、マルクス、エンゲルス、レーニンの引用や社会主義用語はまったくみられないが、如是閑が社会主義文献を十分に読み込んでいることがわかる。「如是閑と河上肇は大正デモクラシー以来の盟友であり、如是閑のマルクス主義修得の教師は櫛田民蔵である。また如是閑は、『我等』誌上に「資本制生産に先行する諸形態」や「賃労働と資本」などを翻訳掲載させているが、これは日本では最初のことではないかと思われる」。「社会的態度」、「団体行動」、「自然権」などのタームは、それぞれ「社会主義運動」、「組合運動」、「ストライキ権」と読み替えられるであろう。一九二〇年代の如是閑は、限りなく資本主義国家の構造とイデオロギーを批判し攻撃するマルクス主義的「階級国家観」に近付いているのである。

そして、大正末年から昭和にかけては、如是閑は、たんなる現代資本主義国家それ自体の批判者という立場を超えて、いまや日本における将来の新しい国家構想を提示している。すなわち、かれは、一九二五年（大正一四）一二月の

「行動の体系としての国家」（『我等』第七卷第一二号）においては、国家は政党や組合と同じく「部分社会」であり、国家をイコール全体社会とする日本の全体主義的国家概念を否定し、また「国家行動の四形態」（『我等』第八卷第二号、一九二六・二）では、「日本という国家は国家行動の体系としては部分社会であり」、「国家は決して道徳〔神聖なるもの〕ではない、国家を道徳化せねばならない」という意識の起こったことは国家が道徳的ではない証拠である」として当時の国家主義的傾向を攻撃している。

さらに、「国家行動は生産行動の上に支配関係を創設することによつて生産行動を利用し、その果実を搾取して一大文化を造り上げた」として国家の階級的性格を明らかにしている。そして、「管理国家への進化」（『我等』第八卷第八号、一九二六・八）では、現在の「資本の獲得は国家行動の目標を形づくる」、「所有に優位を与えたのは国家制度」である。しかし、こうした「生産組織に於ける所有の支配にもとづく国家の性質は変化して」、やがていわゆる『管理国家』、『労働国家』と称せられる社会組織に向つて進化する。支配から管理への進化は、今日の国家的進化の主潮をなすものである」と述べている。

以上の如き閑の政治思想はどのように位置づけられようか。内容的には、マルクス主義をふんだんに採用している。しかし、当時のマルクス主義者やレーニン主義者のように「力による革命」や「プロレタリアートの独裁」を主張したものではない。かといって、マルクス主義やレーニン主義との対決を旗印にかかげるいわゆる社会民主主義者の主張に味方しているものでもない。如是閑の周辺には両方のタイプの社会主義者が多数いて、如是閑はどちらかといえば、容共主義の立場に近いといえる。しかし、かれの論稿を読む限り、かれは、マルクス・レーニン主義という名の社会主義とリベラル・デモクラシーを發展させて議会で多数をえて権力を握り福祉資本主義を実現させようとするイギリス労働党型の社会民主主義をミックスした「社会的」民主主義論を構築しようとしていたのではないかと思われる。そして、かれが構想していた国家形態は、第二次世界大戦後のポーランドで一時期試みられた「労働者の自主管理」による自

由・平等の保障された「連帶的」国家ではなかったか、と思われる。

しかし、大正デモクラシーによる人民勢力の進展は、歴史の弁証法として逆に国家権力の強大化をもたらす。一九二五年の「男子普通選挙権」の賦与（あづか）は「治安維持法」（び）という弾圧法規によってガンジガラメとされ、「大正デモクラシー運動」は、「軍部ファシズム」による「アジア侵略」の遂行によって一挙に粉碎される。

## 六 日本ファシズムに抗して

『我等』は一九二七年（昭和二）七月をもって創刊以来第百号（第九卷第六号）目を迎え、如是閑は「我等」の第百号と時代の流れ」（無署名）という論文を書いている。

そのなかで如是閑は、この九年間の「社会的変化の急激な流れ」のなかで『我等』が比較的に客観的態度を守ってきたことを評価し、「科学的客観主義ということ自体がすでにブルジョア科学にたいする抗戦的態度の一步である」と述べ、今後ともこの態度をとり続けることを確認している。

これにたいして大山は、『我等』は如何にしてその新進路を打開すべきか？」を書き、『我等』が「社会理念」の面での啓蒙事業の段階を立派につとめてきたので、これからは闘争の準備時代——資本主義の進化の確立に即した無産階級の歴史的使命を開明し、理論と実践の弁証法的統一を目指す——へと方向転換すべきよう提言している。

大山はその前年の十一月に早大教授を辞職し、労働党中央執行委員長に就任し、実践運動の真っ只中に身を挺していたから、先ほどの発言は、そうした四囲の状況を背景にしてなされたものと思われる。しかし、如是閑は「断じて行なわず」、「有言不実行」という信念をにかけて「実践運動」とは一線を画し、「原理的思考態度」「自由・平等・平和など

の「市民的自由」の価値を社会主義革命という大義の上におく、「市民社会論」的発想」にもとづいた「言論戦」に徹する方法を貫こうとしたのである。そして、この方法によつて、『我等』は、当時のきびしい保守反動の嵐が吹き荒れる昭和初期の時代を生き延びることができたのである。自由と自己保存のためになにを優先させるべきかを正しく柔軟に認識できる思想・理論こそ、ホップズ、ロック、スミス以来の「市民社会論」の本質をなすものといえよう。

ところで、満州事変勃発「一九三二年（昭和六）」の前年、『我等』は三月号（第一二巻第二号、通巻一二八号）をもつて終刊となつた。その理由は、経営面・編集面とさまざまであつたが、国際・国内情勢の変化によつて、なんらかの再編成が必要となつたのであろう。そこで『我等』は、『社会思想』「一九二〇・二一年（大正九・一〇）」に東大卒の旧新人会を中心につつた機関誌で、蟬山政道、波多野鼎、林要、嘉治隆一、佐々弘雄、三輪寿荘、河村又介、新明正道、京大出身の後藤信夫（松方三郎）などがメンバーで、かれらは、『我等』が一九二〇年の「森戸（辰男）事件」を熱心に擁護したことから親しくなつていた」を吸収合併して、『月刊批判』と改題し、新しい時代に適応できる「若い力と頭脳」を導入した。

もつとも、これによつて、『批判』の内容が実践的活動に直結したわけではなかつたが、しかし、『批判』が『我等』より理論的戦闘性を強め、階級戦の旗幟を鮮明にしたことは間違いない。なぜなら、『批判』創刊号の「改題之辞」（無署名）において如是閑は、「社会的知覚や社会的感覚は、たんに事実を反映するだけのものであつてはならず、歴史の動因、社会的行動の動力となるべきものである」と述べ、また如是閑は、社会的知覚とは「階級対立社会における歴史の進行過程の認識であり、社会科学とは歴史的知覚の手段だけにとどまらず、歴史創造の手段である」と定義しているからである。

如是閑が、このようにいふその啓蒙運動の強化のための態勢を整えたときは、日本は満州事変前夜にあり、また世界大恐慌の嵐が日本にも波及し、山田盛太郎、平野義太郎、三木清らが共産党シンパ容疑で検挙され、青年将校を

糾合した国家改造運動がまさに始まらんとする暗い不安の時代であった。

## (一) 「反国家主義」から「反ファシズム」へ

日本の自由主義者たちのなかには、いや社会主義者たちですら、昭和一〇年代以降、軍部に協力する者が多数現れた。こうしたきびしい非常時体制下にあつて、表面的な華々しい抵抗こそできなかったが、如是閑は「消極的抵抗」を持續して決して屈することはなかった。その理由は、ひとえに、かれが近代三〇〇年にわたる自由や民主主義にかんする思想原理や歴史的発展を——日本人としてはきわめてまれなることであるが——、正確に捉えていたからである。

ところで如是閑が『批判』を拠点に本格的にファシズム批判を開始するのは、日本が満州国を独立させる前半の一九三二年（昭和七）三月頃からヒトラーが政権を奪取する一九三三年（昭和八）にかけてである。もともと如是閑は、日本の近代化・自由化・民主化のために、この十数年間、「固陋なる国家主義」と死闘をくり返していた。ところが、一九三〇年代に入ると舞台は突然暗転し、いまやかれの眼前には国家主義よりも数倍も兇暴なる「国家主義」を標榜する軍部ファシズム勢力が登場してきた。かれは、新たな理論武装によつて早急に陣営をたて直し、ファシズムと闘わなければならなかった。だから如是閑が、「日本の政治過程を批判していた論文が自ら日本ファシズムの批判となつた『日本ファシズム批判』、一九三三年（昭和八）」と述べているのは、当時の理論状況を正しく伝えているものといえよう。



## (二) 如是閑の「ファシズム批判」の特色

ところで、ひとくちにファシズムといっても、イタリアとドイツと日本とでは、その成立の経過と思想構造と運動形態についてはきわめて異質なものがある。そのいちいちについて述べる紙数がないので省略するが、ただこの三国のファシズムについて共通している点がある。

まず第一に、これら三国は、英米仏などの列強より遅れて近代国家への道を歩みはじめたため、先進諸国に追いつくために「強力い国家」を形成しようとし、そのためには、「人権と自由」を内容とする「市民的自由」を容赦なく制限し、その意味できわめて非民主主義的な国家となつた。

次に、この三国では、なによりも「国家的統一」を重視し、そのためには国家権力への集中を妨げる階級闘争やそれをサポートするマルクス主義や共産主義、社会主義運動、労働・農民運動を徹底的に弾圧した。

第三に、「国家の強大化」は、「領土の拡大」に結びつき、これら三国は、それぞれに東欧(ドイツ)、エチオピア(イタリア)、アジア(日本)をターゲットに侵略行為にでる。このことによつて、三国は、「防共協定」や「三国同盟」を結び、最終的には第二次世界大戦を仕掛けることになる。如是閑は、一九三〇年代初めに早くも日本のファシショ化は第二次世界大戦に至ることを恐れ、それに警告を発し、日本ファシズムの性格とそれを押さえ込む方法をみいだそうとしている。

では、日本ファシズムの特色とはなにか。一九二二年(大正一一)一〇月三〇日に、ムッソリーニ率いる「ファシスタ党」がローマに進軍し、国王や資本家層と手を結び、その承認のもとに政権を樹立したとき、世界の人びとは、それが暴力的反動体制なのか、ブルジョア独裁の変種なのか、それとも新型の社会主義運動なのか「ムッソリーニは、もと

もとはネンニ社会党の幹部であつたから」、その実体がよくわからなかつた。しかし、先ほども述べたように、ファシズムとは、英・米・仏にくらべて遅れて出発した資本主義国家たとえば伊・独・日などの二番手の国々が、第一次世界大戦後の敗戦（独）と経済的危機（独・伊）に直面して、「ファシスタ党」（伊）や「ナチ党」（独）が極端なナシヨナリズム（英・米・仏）論、「社会・共産主義」論を全面に押し立て、強力な国家的統制によって、国力増進をはかり国民生活を安定させるというキャッチフレーズによつて不安定な地位にあつた中産階級——資本家層・労働者階級はそれぞれに組織をもつていたが、中産階級は孤立・分散的狀況におかれ、それ故に危機意識が強かつた——を組織した政治・経済体制であつた。「ファシズム運動」が「下からの（国民）革命」といわれたのはそのためである。

これにたいし、日本のばあいは、明治以来の上御一人である天皇を頂点とする官僚・軍閥政権が「上から」国民を組織して作りあげた「全体主義的国家体制」であつた。この点で、日本ファシズムを分析するさいには、軍部とくに陸軍とそれが先導しつゝあつたアジア侵略問題、また徴兵制度をとる帝国陸海軍の中核部分である下士官・兵卒層の大半が農村出身者であること（農村問題）などを考慮に入れる必要があつた。

ところが反体制側とくにマルクス主義的社会主义者たちのファシズム論としては「コミンテルン規定」（一九二八年）しかなく、それによると「ファシズムとは、資本主義の危機状況を回避するためにとられた独占資本の最も兇暴な独裁形態」というものであつた。そして、伊・独両国において、中産階級の運動が政権を維持し、国家レベルでの国際経済を展開できるためには、ムツソリーニもヒトラーも、最終的には独占資本家層と握手することになるから、この「コミンテルン規定」は、基本的には、ファシズムの本質を突いたものであつた。

したがつて、日本でも、自由主義者や社会主義者たちのファシズム研究は押しなべて、ファシズム独裁Ⅱ大工業・金融資本の独裁と規定したものが多かつた。そして、ファシズム運動における中間層の役割を評価する論者たち「たとえば土方成美の『ファシズム』（一九三二年）」は、ファシズムを肯定する反動主義者とみなされていた。

しかし、如是閑は、ファシズムの性格が「コミンテルン規定」通りであるならば、もはやファシズム研究をおこなう必要はないのではないか、と述べ、一九三一年の『批判』第二巻第三号・第四号の二号にわたって「ファシズムの社会的条件と日本の特殊事情——日本にファシズムの可能性があるか」、「我が国に於けるファシズムの可能と不可能」という二本の長大論文を発表している。そして、これらの論文では、伊・独のファシズムと日本のそれとを比較しつつ、日本ファシズムの特色とそれに対処する方法とを論じている。そして、ここでは、大資本主義（独占資本主義、金融資本主義）、中間層問題、農村問題、人口問題、右翼問題、軍部問題、満州事変・中国問題などを視野に入れて日本ファシズム論を体系的に組み立てているが、これは、日本人の手になる最初のかつ最もすぐれた研究である、と言ってよい。その証拠に、アメリカで最も評価の高い自由主義雑誌『ネーション』が、一九三二年にはじめて日本ファシズム論を二本掲載しているが、これを読むと、この論文は、実は如是閑の『批判』に発表した二つの論文の要約であることはまちがいないからである。

では以下、如是閑のファシズム論について述べる。

### (三) 日本におけるファシズムの可能性

如是閑が本格的に日本ファシズムを分析した最初の作業は、「ファシズムの社会的条件と日本の特殊事情——日本にファシズムの可能性があるか」である。

如是閑は、「ファシズムとは、資本主義国家の発達がいまだ不十分で、中小資本家本位の政治を反映させるべきブルジョア・デモクラシーがいまだ有力でありえない段階で、大ブルジョアに対抗する社会主義の左翼的方法が、中小地主や中小商工業者の方法とかけ離れたため、中間層の対抗方法をみいだそうとして発生したものである」、という。

そして、このファシズムは、「プロレタリアートの独裁」にたいして、「小市民的階級の暴力的独裁」の概念をつかみ、結果的には社会民主主義と対立して大ブルジョアジーの支柱として役立つ。さらに、このファシズムが大資本主義と結びつくプロセスについて、如是閑は、イタリア・ファシズムが一方で社会主義化、他方で大資本主義化を抑えた「前者としては反共主義を、後者では経済の国家統制化」ときに、それが鎖国的自給自足主義国家でない限り、その「中産階級的独裁」を脱して、最後は「大資本主義独裁」へ隷属する「こうしたファシズムを如是閑は、「クルール・ファシズム」、「合法的ファシズム」と呼んでいる」ほかない、と説明している。

一九三一年時点で、すでに、如是閑は、のちにヒトラーがドイツ大資本家層の代表「国家人民党」と癒着し「一九三二年七月二〇日の「パーペン・クーデター」、また日本の軍部と財閥が吻合する可能性をみごとに予測している。しかし、他方で如是閑は、日本におけるファシズム政権成立の可能性にかんしてはまだ樂觀視している。すなわち如是閑によれば、「日本の反動主義者は、いまのところ依然として原始ファシズムの立場「国粹主義者や領土拡大を目ざす民族主義者などの暴力主義的運動で、まだ大資本主義と結合していないファシズムをさす」をとっており」、「合法的ファシズム」まで進んでいない、からだと考えていた。

とはいえ、如是閑は、日本におけるファシズムの危険性を十分に警戒している。だからかれは、続く論文「我が国に於けるファシズムの可能と不可能」『批判』第二巻第四号』において、日本の特殊事情を考慮に入れたうえで、今後日本がイタリア・ファシズムと同じ方向に進むかどうかを検討している。

如是閑は、日本はイタリアに似ているため、ファシズムの成立に好都合の条件をもっている、という。なぜなら両国とも資本主義の発達がいまだ遅く、資源に乏しく、販路も比較的狭く、中小商工業は大資本主義によつて壊滅状態にあるから、というのがその理由である。たとえば、日本の中小資本主義は、大資本家が利潤獲得を唯一絶対の目的としている、といつて非難する。かれらは社会政策主義を叫び、大資本主義の自由主義・個人主義・利潤獲得主義「歯止めな

き市場原理の主張」に反対し、その国際主義「悪しきグローバリズム」を排斥する。この点で、ファシストは、インターナショナルな非国家主義・非民族主義を主張する社会民主主義とも袂を分かつ。したがって中小資本主義にともなう民族主義・国家主義・封建的道德主義による復古主義は、その経済的地位にもとづく観念的態度であり、ファシズムの「精神」となる。

それは、物質主義に反対し、神・祖国・民族等々の象徴的存在を操作する。以上のことからみて、わが国の地質はファシズム培養に適するから、日本におけるファシズムも「原始的ファシズム」から「合法的ファシズム」へと変質する可能性をはらんでいる、と指摘している。

では、当時の日本の現状において、ファシズム運動はイタリアのムッソリーニのように政治的機会を掴みうる「政権の獲得」か。これについて如是閑はどのように捉えていたか。結論的にいえば、如是閑は現時点では政権獲得の可能性はうすい、という見解を取っている。その理由は、日本のブルジョア政治は、三井、三菱のような各資本閥を背景とするブルジョアジーの内部闘争の反映であり、わが国の二大政党主義は政治的独占の一形態であるから、ファシズムのつけ込むすきは乏しい、という。要するに、かれによれば、日本では、ファッショ分子が、かなり有力なブルジョア政党の統制下にあるといった日本特有の形式をとり、したがって政党自体がファッショ化しない限り、地方の中間層の暴力的結成が、政党政治を革命する力をもつことは不可能である、と述べている。

にもかかわらず、如是閑は一般的な民主主義の定着していない日本のような国においてはファシズムが発生しやすい、集会・結社・言論・出版の自由にたいする警察の暴力的方法や、教育の機構的統一などがファシズム成立の前提や温床となることに強い警戒心を表明している。民主主義を擁護し発展させることが反ファシズムになる。これが如是閑の基本戦略であつた。

ところで、如是閑が「日本ファシズム論」を執筆してまもなく満州事変が勃発し、いよいよ、日本ファシズムの中核

部隊である軍部とくに陸軍が正面切つて登場してきた。そこで、如是閑は、満州侵略・軍部・日本資本主義の相関関係から日本ファシズムの分析をおこなっている。

如是閑は一九二三年（大正一二）頃から『我等』、『太陽』、『改造』誌上において「中国革命」や日本政府の不当な中国政策について一貫して批判的な発言をしてきた。しかし、その後、日本政府は満州侵略を契機として急速に台頭してきた軍部勢力と結びつき、ますますファッショ的性格を帯びてきた。だから、かれは、「満州侵略を行なつた軍事的勢力の背景はファシズムだ」「実践的ファッショの盲目的人口論」「批判」第三巻第一号、一九三三年（昭和七）一月」と述べ、日本資本主義と軍部の結合を指摘している。すなわちかれは、満州は、本来日本資本主義の搾取の対象であるが、日本のファシストは、満州を獲得することによつて日本の過剰人口問題を解決しようと真剣に考えており、その立役者が軍部である、というわけである。もつとも、この時点では、如是閑は、農村出身者を主体とする下級軍人（下士官・兵卒層）はファッショナルになりやすいが、軍の最高首脳は最高資本主義「大資本主義、独占資本」にたいして理解を示している「共通の利害をもっている」ので、満州侵略は過剰人口の処分とはなりえても、資本主義の論理「『資本の論理』」によつて規定される「資本主義に都合のように処理される」とみていた。

以上の如是閑の日本ファシズム分析は、「独占資本主義の組織的形態」という「コミンテルン規定」だけではわからない日本ファシズムの特殊性を理解するうえでは有効であり、かつ「反ファシズム闘争」にさいしては、「市民社会思想」（生命の尊重と人権・自由を最優先させる思想）の構築が必要であることを人びとに知らしめようとした点で有益であつた。

しかし、ドイツにおいてもそうであつたように、日本のばあいにも、最高資本主義は、軍部（ドイツではナチ党）を統制できるどころか、それと一体化し、ついには軍部の主導の下に全体主義的総動員体制へと再編成され、そのことが、日中戦争、太平洋戦争突入の因となつたことは指摘するまでもあるまい。しかし、如是閑が、昭和初期において、

日本においてもファシズム成立の要因がいたるところに存在していること、また満州侵略がますます日本を国際的に孤立化させ、ひいてはそれが第二次世界大戦への引金にもなりかねないことを指摘していたことは、当時、そうした問題性の把握がほとんどなかった（三宅雪嶺『同時代史』第六巻を見よ）だけにきわめて重要である。

### おわりに——普遍的思考としての「市民社会論」

これまで如是閑の思想を、かれと戦前日本における「国家主義」・「ファシズム」・「超国家主義」とのバトルについて述べてきた。しかし、如是閑の思想は、国家論にとどまるものではなく、人文・社会の諸分野のすべてにわたって展開されている。なかでも、大正末年から昭和初年におけるかれの「フェミニズム」（日本の論壇で、フェミニズムという言葉を使ったのは恐らく如是閑が最初だと思われる）、「中国革命・中国認識」「新聞道德（マスコミ）」「学問・言論の自由」などにかんする論稿は、「市民社会論の本質」すなわち「民主主義の本質」を知ろうえできわめて興味深いものがあるが、紙数も大幅にオーバーしているので次の機会に譲らざるをえない。

一九二八年（昭和三）一月から二九年の七月にかけて、『鼎軒田口卯吉全集（全八巻）』が刊行されている。田口は陸羯南と並び称せられた、明治二〇・三〇年代における日本思想界・ジャーナリズム界のスーパースターである。田口は、日本にアダム・スミスの古典派経済学を紹介し、かれ自身もそれを適用して日本に「商業共和国」という名の近代国家を作ろうとしたり、イギリスの『エコノミスト』の向こうを張って、『東京経済雑誌』を発行した（一八七九年（明治一二））ため当時の人びとから「日本のアダム・スミス」と呼ばれた。

ところで『卯吉全集』の仕掛人はどうも如是閑のようであり、編集・解説者としては、黒坂勝美（第一巻）、森戸辰

男・福田徳三（第二巻）、櫛田民蔵・河上肇（第三巻）、長谷川萬次郎・吉野作造（第五・第八巻）、大内兵衛（第六・第七巻）などが名を連ねている。そして、この編集・解説メンバーをみると、河上、櫛田、大内、森戸はマルクス主義者であり、吉野、福田、長谷川は自由民主主義者あるいは社会民主主義者である。とすると、この『全集』は、自由主義者からマルクス主義者をふくめた知識人の連合戦線であったことがわかる。

ではなぜ、この時期に田口卯吉なのか。これについては、『全集』刊行の一九二八年の『我等』第七号における櫛田民蔵の「忘れられた田口先生忘れ得ぬ田口先生」という論文をみればよい。それによると、迫りくる保守派とファシズム派との大合唱に対抗する無産政党が、当時、まずは、「政治的・経済的にブルジョア・デモクラシーの獲得を問題」とし、「大資本の専制を牽制する」ために、当時ファシズムとの吻合をはかりつつあった大資本主義に健全な自由貿易論者田口の思想をふつける意図をもってこの『全集』が発刊されたことがわかる。

このようにみるならば、「市民社会」の思想は、まずはホッブズ・ロックのような「民主国家」を正当化する「政治社会」<sup>シビリス・サイアティ</sup>論からスミスの「市民社会」<sup>シビリス・サイアティ</sup>論へと発展させられ、さらに一九世紀末から二〇世紀二〇・三〇年代にかけては、如是閑やラスキにみられるように、社会主義をも「民主主義」の発展の一形態として包摂し、それによつて、「自由・平等・平和」の思想を人類共通の普遍的価値として承認する地球的規模での「市民社会論」へと発展してきたことがわかる。

このことは、戦後、如是閑の活動のなかでも実証されている。それはまず第一に、戦後日本の政治は、一見「民主政治」へ転換したように思われるが、その主体は、依然として、きわめて保守・反動的であることを指摘して、自由・平等・平和などの「市民的自由」やりべラル・デモクラシーの政治・社会観である「市民社会観」の修得を人びとにアピールしている。如是閑は、敗戦後、思想界やジャーナリズムの世界があまりにも無反省に「えせ民主主義者」に転換したことを憂え、西欧デモクラシーの原理をよりいっそう考究することをすすめる（「敗に乗じる」、『文芸春秋』、一九四



五・一二、「根本の問題だけを」、「世界」、一九五二・一）また戦後になつてもきわめて封建的な思想〔ヘーゲルの国家主義〕が根強く残存していることに警告を発している（『ドイツ学からイギリス学へ』、『中央評論』、一九五一・一）。

だから、冷戦構造下の「米ソの対立」激化の時代において、当時の日本人が、人権・自由・平和などの市民的普遍原理を最優先させるのではなく、「自由主義か社会主義か」、「アメリカかソ連か」という「敵・味方」的思想でものごとを考えていたことにたいして、如是閑は、きわめて早い時点で体制・イデオロギーの違いを超えて、すべての人類にとつて必要な「平和共存」の思想——「平和共存」の思想が両陣営のあいだで認められるようになったのは、驚くべきことにベトナム戦争終結に向けての一九七二年二月のニクソンの中国訪問における「米中共同声明」の中においてであつた——を訴えている。

そして、如是閑が、このような普遍的原理を尊重するホッブズ、ロック、スミス以来の西欧デモクラシーの思想を掴みとつたのは、かれが、近代国家・近代社会の成立から福祉資本主義・社会主義・ファシズムの渦巻く二〇世紀世界に至るまでの民主主義の歴史・思想・制度を考究し続けたからである。

戦後民主主義の旗手といわれる丸山真男の近代国家論、ファシズム論、日本文化論などは、恐らく、それにかんする如是閑の著書・論稿を丸山が中学時代から読んで影響を受けたためと思われる。丸山が、自分の先生は、南原繁先生「ドイツの哲学思想」と長谷川如是閑「イギリス思想」さんだ、とことあるごとに述べているのは、それ故にである。われわれも、如是閑の全思想を学習するなかで、現代における「市民社会の精神的価値」を再確認することができるであらう。

## 参考文献

- 田中浩著『長谷川如是閑研究序説——社会派ジャーナリストの誕生』、未来社、一九八九年
- 田中浩著『国家と個人——市民革命から現代まで』、岩波書店、一九九〇年
- 『長谷川如是閑著作集』（全八巻）岩波書店、一九八九年～九〇年
- 田中浩著『近代日本と自由主義——論吉・卯吉・羯南・如是閑』岩波書店、一九九三年
- 飯田泰三著『批判精神の航跡』筑摩書房、一九九七年
- 田中浩著『日本リベラリズムの系譜——福沢諭吉・長谷川如是閑・丸山真男』（朝日選書）、朝日新聞社、二〇〇〇年
- 田中浩著『二〇世紀という時代』（NHKライブラリー）、日本放送出版協会、二〇〇〇年